

◆ 巻頭言

未来の老女と老小町

やなぎ みわ

5年ほど前、ドイツの美術館で個展を開催したとき、特設舞台で「老女の舞」を舞った。能楽を日本舞踊にした演目「関寺小町」である。恋人に百夜(ももよ)通いをさせた絶世の美女が、後に百歳(ももとせ)の物乞いになるという衰老落魄説話は、仏教色の濃い13世紀以降の能の中に現れる。「老いの姿の恥ずかしや」「百年の姥が身の恥ずかしや」。歌の中には、小町が嘆き恥じ入る台詞が繰り返され、それを静かな所作で体現するのは、能の中で最も意味深く難曲中の難曲と言われる。世阿弥の能楽の中で老女は世の無常の象徴であり最も奥義であるとされていたようだ。老女もの「姥捨」^{うばすて}「檜垣」^{ひがき}も、いずれも孤独や悲嘆を謡っている。「山姥」^{やまんば}は、赤い肌にカッと見開いた大きな目と口で外見こそ老小町とは対称的であれ、山に暮らす^{せきりょう}寂寥を背負い、そして「黒塚」^{おうな}になると般若面をつけた完全な鬼女である。温和な「高砂」の嬪になるには相方が必要で、あくまでシテは翁で嬪はツレ。シテとなるには、ヨボヨボの小町か、孤独な山姥か、情念の鬼女か、という選択肢しかない。

男性の老人が「老翁神」という祝儀の神になるのに対して、零落の小町や、与えられた存在意義や規範に抵抗し逸脱をする山姥は、母であるかどうかにかかわらず、すべて共同体から外れた棄民でありアウトサイダーである。

このときの個展は「グランドマザーズ——わたしの祖母たち」。若い女性たちが半世紀後の自分の姿を想像し、私がそのアイディアを聞き取りビジュアル化することによって制作した「架空の祖母の肖像写真」だった。グランドマザーズの中で「未来の老婆」を演じた女性たちは、性差の文化や、年齢の刻印から自由になることを望み、生死を司る母神神話や、里や山といったこの国の農耕的土着性からも離れていこうとしている。雪がちらつく厳寒のベルリンで、私は老小町を体現して改めて前近代東洋の女性観を理解した。そして展覧会場ではドイツのおばあさまたちが、架空の老女の颯爽とした姿を「これはまるで私よ!」と熱心に見入っていた。

※シテは能楽における立ち方・主役、ツレはシテの思いを聞き出す脇役。



PROFILE

やなぎ みわ

美術作家。京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。主な作品に、若い女性が自らの半世紀後の姿を演じる写真作品「マイ・グランドマザーズ」、実際の年配の女性が祖母の思い出を語るビデオ作品「グランドドーターズ」、少女と老女の物語をテーマにした写真と映像のシリーズ「フェアリーテール」など。2009年ヴェネチア・ビエンナーレ日本館代表作家。国内外展に参加多数。2010年には2作品の演劇作品を発表。<http://www.yanagimiwa.net>